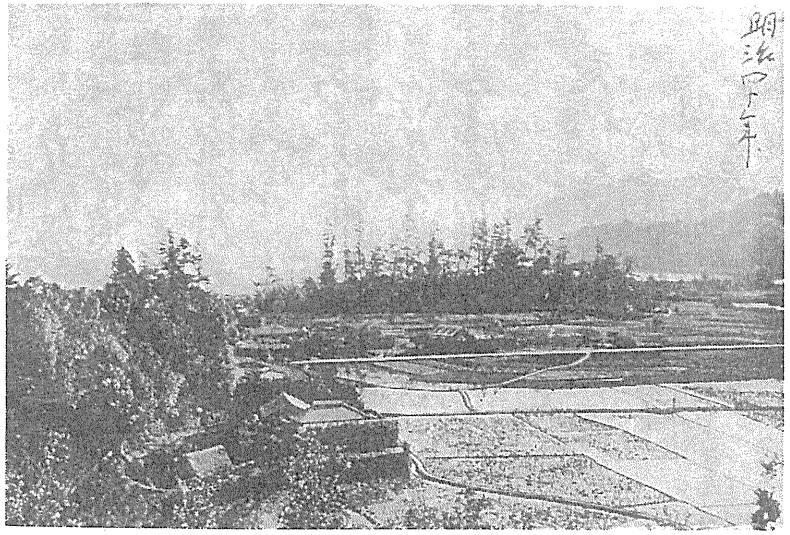
15 災害

藩政時代、中土佐地区は二度の大きな地震に見舞われている。一度目は一七〇七年（宝永四）十月四日の大地震で「亥の大変」と呼ばれ、恐れ伝えられているものである。特に久礼の被害はすさまじいものであった。津波による高潮は南は大坂谷まで、西は常賢寺まで、北は焼坂のふもとまで襲い、町中の三分の二が海中に没したと伝えられている。家屋も大半が流失し、死者も二〇〇人前後に達した。久礼八幡宮もこの地震の被害をまともに受け、柱一本残さず、すべて流失してしまった。上ノ加江も高潮に襲われて、佐竹氏の菩提寺の禅源寺や広野神社が流失、相当の被害を受け



明治40年の久礼

た。矢井賀は高潮を受けたが、特に目立った被害はなかったようである。

二度目は一八五四年（安政元）十一月五日の地震で「寅の大変」と呼ばれた。上ノ加江では流失する家屋が二〇〇軒をこえ、そのほとんどが浦分であった。船も一九艘流失し、残ったものといえば広野神社ぐらいであった。久礼でも北村、大川谷、長沢谷、大坂谷方面ならびに大野でも山ぎわまで潮が入りこみ、二〇町歩余りの田畑が荒れ地となってしまった。家屋の流失も多く、死者も一〇人を数えている。船も五〇艘ぐらい流失してしまい、その被害は「亥の大変」に次ぐ大きなものであった。

その他、台風などの被害もたびたび受けているし、小さな家屋の密集している浦分では火災の被害はさらに大であった。久礼、上ノ加江両浦の主だった火災だけでも数回あった。久礼浦では一六六八年（寛文八）の火災で一五〇戸が焼失している。また一七六九年（明和六）の火災では二四四戸焼失という被害を受けている。上ノ加江浦も同様で一七八八年（天明八）の火災では浦分全焼、一七九九年（寛政十一）には七〇戸ほどが焼失し、一八四四年（弘化元）の火災では再び浦分全焼の被害を受けている。

1、長宗我部氏は秦の始皇帝の子孫秦氏の流れをくむと伝えられ、山内氏は藤原鎌足の子孫と伝えられている。よって、秦藤交代とは秦氏すなわち長宗我部氏から藤氏すなわち山内氏への政権の交代を意味する。

2、ふだんは農業に従事し、いざという時、具足（よろいの一種）を一領（一つ）携えて戦場にかけつけたところからこう呼ばれた。

3、仙台伊達藩のお家騒動。くわしくは本編参照。なお、伊達騒動の中心人物の一人原田甲斐を主人公とした小説『樅の木は残った』が山本周五郎によって書か